

研究ノート：

オフサイドフラッグ、共同体と判定

北 岡 一 道

(2011年2月4日受理)

1. はじめに

おおくのスポーツゲームでは、トランプや将棋などのようなゲームとちがい、ゲームのなかの動き、行為が、その場その場で、評価・解釈される、ということがある。＜判定＞は、それら評価・解釈群のなかでも、直接、ゲームの進行に関与するものである。本稿では、まず、具体例をサッカーの＜オフサイドの判定そのもの＞と、それにたいする＜評価＞、＜解釈＞（それらも、ひろい＜ゲーム＞のなかでは＜一種の判定＞といえる）のありかたをみて、つぎに、それがうめ込まれた社会・共同体との関係にかんする所説をすこしく、読み解こう。

2. 日本－シリア戦の＜オフサイド＞

サッカーの試合の最中に、突然ホイッスルがなる。そしてレフリーから、オフサイドの＜判定＞をきくことがある。このようなばあい、選手も観客も、オフサイドがあったことを、はじめて知ることがある。比較的単純なルールのサッカーのなかで、オフサイドはそのルールも、実際の判定（の過程）も理解しにくいものとされる。

本稿は、もと、記号過程における＜判定＞の問題をかんがえるものだった。そのなかで、2011年1月13日にAFC、日本－シリア戦がおこなわれ、試合において、＜オフサイド＞の認定あるいは、その解釈について一般の注目があつまった。直後から、そのことをめぐって、いろんな言説がおこなわれた。＜判定＞にかかわる言説を、よくしられた事例として、ここで、みてみ

よう。実際におこなわれた判定の成否の意見や、しかるべき措置の提言などは目的でなく、その事例にかかわる判定の過程や、（かならずしも＜実際の判定の現象＞とかぎらず）判定にかかわる＜言説＞をカンタンにおさらいしてみる。

その判定にかかわる状況はつぎのようである。（ウェブから、事実、権威にかかわらず）言説を参考にする。）13日（ドーハ、カタールスポーツクラブ競技場で）アジア杯一次リーグ・B組、日本－シリア戦がおこなわれた。後半25分、日本GK川島が「クリアしたボールが、シリア選手マルキとDF今野の＜あいだで、はねかえり＞、ゴール前にこぼれた。ボールをおう相手FDと川島が＜交錯し＞た。このとき副審はオフサイドフラッグをあげていた。しかし、主審はこれを、得点の機会の阻止とみなして、川島にレッドカードをあたえて、川島は退場になった。そのとき、日本選手は抗議したが、判定はかわらなかった。

いくつかのウェブページでの判断では＜オフサイド関係＞で；（以下、ほぼ分的な引用の形にしたが、字句など統一して、改変した。）

＜1＞この場面、マルキ（シリア選手）は川島よりずっと前に位置をとっていたのだから。間違えなくオフサイドだった。実際、アシスタント・レフリーのフラッグは（オフサイドの）サインとしてあがった…

＜2＞線審はオフサイドフラッグを掲げていたが、…

＜3＞日本人選手が2人ほどオフサイドの旗をあげたアシスタント・レフリーに駆け寄ります。

＜4＞日本協会の原博実技術委員長は問題のシーンについて「あれはオフサイド」と話し、AFCに抗議する考えを示した。

などとなっている。日本の視聴者、線審、（＜日本人選手＞、）日本協会の原氏などが、＜オフサイドの判断＞をしている、あるいはもめている。

これにたいし、実際の判定は（すくなくも、その場で成立したのは）；

＜5＞イランのモーセン主審（モーセン・トルキ？）は「（マルキと競っていた）今野のバックパス」とPKの判定を下し…川島は一発退場。

＜6＞主審はシリアのオフサイドをとらず、その後の川島のファールをとったものだと思われる。

＜7＞「レフリーは（シリアの選手が出したボールではなく）日本側のバックパスだからオフサイドではないと選手側に説明した……」（と日本協会が理解。）

と、日本の視聴者、日本協会側のみかたとなっている。（13日その日には協会側は正式抗議せず（抗議文書を提出せず）、翌14日にAFCに英文の抗議文書を提出したという。AFCの規定に抗議の受付の条項もある。）

判定の＜2つ＞の流れをのべたものにつぎの例がある。

＜8＞（1）今野がさわった＞オフサイドではない＞川島はファール＞PKレッドは妥当。（2）シリアのパス＞明らかにオフサイド＞川島の接触はオフサイド後だから関係なし。レフリーは（1）とジャッジし、日本側は（2）と見ていた。

＜9＞（Rating Referee、というHP内のブログ）

So basically the question is whether the Japanese or Syrian player played it to the Syrian player in the off-side position? As we can see in the video, Referee, Mohsen Torki from Iran thinks that the Japanese

player played it to the Syrian player, therefore NO off-side offence, an obvious foul has been committed by the Japanese goalkeeper...PENALTY! and obvious dismissal for DOGSO...

But Torki's AR1 and fellow countryman, Hassan Kamranifar has seen differently and raised his flag for the off-side offence, believing the ball was played by the Syrian player to his team mate in the offside position.

（だから基本的に、オフサイドポジションで、触れたのが、日本選手かシリア選手かどちらか、というのが問題なんだ。ビデオからすると、イラン出身のモーセン・トルキ、レフリーの考えでは、日本選手がシリア選手に送った、だからオフサイド違反はない、日本人GKが明らかなファウル…でペナルティ。退場。

しかしAR1で同イラン人の、ハッサン・カムラニファル氏は、見かたがちがった。オフサイド違反のフラッグをあげたが、ボールはシリア選手が、オフサイドポジションにある味方に渡したと判断したのだ。）

ここで＜8＞は日本人選手（たち）の判断と主審トルキ氏の判定の解釈の差がのべられており、後者は＜レフリーを評価する＞というHPの投稿の一部だが、主審と副審の判定＝解釈のちがいにについていっている。

3. 審判法とオフサイド

順序は逆になるが、うえにあった＜オフサイドの判定＞の前提として、サッカーにおける＜審判法＞と＜オフサイド関係ルール＞というものがある。このポイントを確認しておく。教科書的には常識的なことであるが、日本シリア戦におけるレフリーの判定、まわりの解釈、そこに関与する記号的な過程の理解にやくだつだろう。

おもな規定として＜ルール＞と＜審判法＞がある。まず審判法であるが、主審と副審（2名）計3名の審判者、レフリーがいる。さきのマルキ氏

は、主審、カムラニファル氏は副審として参加しておられた。

そこで、規定で；

<1>主審（1名）は、競技場の対角線を中心に、展開を予測してできるだけ、ボールの近くで判定し、ゲーム競技規則にしたがってコントロールする。笛を吹く場合は；キックオフ、ボールが競技場のそとに完全にでたとき、ゴールイン、反則や違反があったとき…前・後半の終了時…。

主審は（この<対角線式審判法>にしたがって）、ピッチの1コーナーフラッグから、センターマーク、さらにまっすぐ向こうのもう1つのコーナーフラッグをむすんだ（だいたい）直線上を移動して判定をおこなう。（評判のよいレフリーは<展開の予測>がうまくでき、そのうえで試合をうまく<コントロール>する、ことになる。試合時間も限られ、他のおおくの競技にくらべレフリーのよしあしが問題になりやすい。審判自身が法、規則なのではないが、試合はこびが審判に依存するところはおおきい。（<judge>ということばは<法（を）／いう>という語源をもつが。）

さきの主審氏は、<GKのファウル（行為として解釈されるもの）>にホイッスルをふいた。HPなどでは、YouTubeの記録画像で（も）、<オフサイドかどうか>のみきわめることができず、プレイ現場の一番近くに主審がいたので、その判断を是とせざるえない、という言説がある。

そこで、このような主審の移動のしかたのため、（対角線からはなれた）プレイ現場からといい、あるいは選手の背後の位置にあるばあいが生じる。この補完として、副審（の動き）がある；

<2>副審（2名）はそれぞれ競技場の半分の、主審から遠いほうのタッチラインに沿って動く。おもに、スローイン、ゴールキック、コーナーキック、オフサイド、主審からみえない反則を監視し、いずれの場合も旗によって合図する。

うえのばあい、副審（AR1）カムラニファル氏は、これにしたがって、<オフサイドフラッグ>

を提示した。副審のシグナル（合図）は、いずれのばあいも<旗>であるが、主審は<笛>にくわえ、<腕（など体の動き）>、<カード>で判定の合図とする。トルキ氏は副審の<オフサイドフラッグ>に<否定のしぐさ>として（HPの表現にしたがうと）<wave down（手をふりおろして）>いる。

これまで、問題としてきたオフサイドであるが、サッカーのルールの中なかでも、文章規定も複雑である。（図がついても。）オフサイドは、一般には<待ち伏せ攻撃を禁止するルール>といわれる。大略、相手DFの背後で待ち伏せして攻撃するのは、<紳士的でない>、と説明される。

<3>オフサイドは、いつ・どこでという（1）ポジションの問題と、……（2）行動の問題の両面から判断される。……（2）オフサイドが成立する場合……

オフサイドポジションにいただけでは違反とされない。そのポジションにいるプレーヤーが次のようなことで、積極的にプレイにかかわっていると主審が判断したときである。

<4>（<3>の「いつ」についてのみ）ボールが味方プレーヤーによって、触れるか、プレー（パスやシュート）された瞬間の問題で、蹴られたあとは、判断の対象にしていない。

うえの例で、日本側／主審の解釈の対立、あるいは主審／副審の解釈の対立といった言説をみた。カンタンには、マルキ選手と川島選手の接触の直前、最後にボールにさわったのが、シリアか、日本か、ということになる。が、その認定の差にしたがって、オフサイドか否かの判定＝解釈がことなる。オフサイドポジション（位置だけ）なら、遠目にもわかるが、瞬間的な最後の接触はわかりにくい。あるいは、積極的関与の判断は、（副審でなく）主審にゆだねられている。

さらに、日本はこの（選手自身が気付かないことがある）<オフサイドルール>を利用して<オフサイドトラップ>という戦術をしばしばおこなっている。わざと相手FWをオフサイドポジショ

ンに置き去りにしてしまうように、日本側DFが連携する、のである。したがって日本側は審判が、十分期待どおり、オフサイドの判定をしてくれるもの（してくれなければ困る）とかがえていたであろう。

4. サッカーと資本主義

この＜オフサイド＞の問題の追及から、サッカーと社会構造の対応について、大澤真幸（2004）氏は興味深い議論をひきだしておられる。以下、ほぼ大澤氏の所論にしたがう。

サッカーは、イギリスで生まれた。その起源は、「マス（大集団）・フットボール」「モブ（暴徒）・フットボール」「ストリート・フットボール」などと、あとで、呼ばれることになるゲームである、と大澤氏は議論される。（こうした起源と、つづく＜オフサイドルール＞の説明は中村敏男氏『オフサイドはなぜ反則か』によったもの。一般には、ギリシャやローマの似たスポーツが起源だとすることも、おおい。）

これらは前近代の共同体のお祭りの一種で、村や町の全体が球技場になった。共同体の男たち、全メンバーが、これに参加し、数百、千人ていどの大集団で行なった。二つのチームの人数も均等ではなかった。村や町の両端にある水門や水車小屋などのメジルシがゴールとなった。

その＜ゲーム＞あるいは村の＜祭り＞は、＜一点先取＞で終わった。どちらかのチームがボールをゴールまで運び入れると、その＜ゲーム＞は終わり、ということになった。その得点が入ると＜祭り＞も終りだった。祭りをできるだけ長くたのしむため、得点はおそいほどよいのだが、そのためボールを前方で、＜まちぶせてプレイする＞ことを禁じる＜オフサイド＞のルールができあがっていった。（オミコシがくねりあるく＞というが、そういう＜あるきかた＞があるのも、カーニバルのフロート（山車）が、ゆっくり巡行するのも、（一つには）＜祭り＞をながく楽しもう、という発想だろう。）

ただ、この「マス（大集団）・フットボール」「モブ（暴徒）・フットボール」はまさに＜大集団、

暴徒＞であり、1572年、エリザベス女王は、つぎの布告をだしている。

<1>'no foteballe play be used or suffered within the city of London and the liberties thereof upon pain of imprisonment.'

（ロンドンおよび、その特別行政区にあってはくフォテバレ＞はこれを行ない、認めるべからず。さもなければ禁固刑。<foteballe＞は古形。）

サッカーが、こういう「マス（大集団）・フットボール」「モブ（暴徒）・フットボール」からきており、「終わり＝ゴール（得点）の瞬間の爆発的な興奮」が特徴になる。この興奮を「満喫」するため、「過程」をできるだけながくする。「オフサイドの反則とはそのためにこそある」。ゴールの瞬間は「待ちに待った終わり」がきたという感覚なのだ、という。

大澤氏はさらに論じて、「サッカーは、資本主義の精神を反映し」としているとされる。サッカー・ルールの整備、普及の時期が、イギリス資本主義の覇権の確立と対応している。「マス（大集団）・フットボール」の＜オフサイドルール＞こそ、もちこされたものの、＜一点先取＞という＜一度きりの終わり＞の感覚は、サッカーのなかでは（点数は大きくならないが）何点かとり、という＜繰り返しかえしの終わり＞に移った。＜繰り返しかえしの終わり＞とは、資本主義社会における投資の回収に呼応する、とする。

さらに、＜オフサイドルール＞（あるいは相当ルール）が、ラグビーや、ホッケー、アイスホッケーにもある。これにたいし、サッカーによく似たアメリカンフットボールには＜オフサイドルール＞がない。（＜オフサイド＞という名の内容のちがうルールがある。）サッカーに似た、バスケットや、他のアメリカ生れのボールゲームにはこのルールが排除されている。結局、イギリス生れの前者ゲーム群には＜オフサイドルール＞があるが、後発のアメリカで創案されたゲーム群にはそれがない。そのため得点は非常にたかくなる。アメリカでもサッカーが行われるが、まったく一般的な人気はない。大澤氏はそれを、＜オフサイド

ルール>あるいは<終わり>の感覚（意味）による、とされる。

サッカーはイギリスで生れ、その<資本主義の古典段階の精神>を反映している、という。<繰り返しの終わり>の感覚が背後にある。ところが、資本主義の前衛、アメリカでは、<非常におおくの繰り返しの終わり>あるいは<終わりの意味の喪失>がおり、サッカーの不毛地帯となっている。資本主義とサッカーの変遷が呼応するものとして理解できる、とする。

5. ゲームと生活形式

ウィトゲンシュタインについて、判治聡氏 ([Http://www.kotoba.ne.jp/~dune/index.cgi?k=wit_dost](http://www.kotoba.ne.jp/~dune/index.cgi?k=wit_dost)) が、かかれたもののなかに、ウィトゲンシュタインとドストエフスキーの関係にかんする考察がある。

< 1 > (判治 98.9.12. [Http://www.kotoba.ne.jp/~dune/index.cgi?k=wit_dost](http://www.kotoba.ne.jp/~dune/index.cgi?k=wit_dost))
ウィトゲンシュタインが「言語ゲーム」という基本的アイデアに導かれたのは、マルコムの回想によれば、ある日フットボールがプレイされているグラウンドのそばを通りがかったときに思い浮かんだインスピレーションによるもの。だということですが、それだけなら木から落ちるリングをみて「万有引力の法則」に思い至ったニュートンに類する印象を与えるだけで、あまり面白くない。

<言語とは>といった一般的な議論で、言語を<ゲーム>にたとえるのはソーシャルや、イエラムスレウなど、いくつも例があろう。が、かれらのばあい、すぐあとで、<チェス>をもちだしてくる。(かれらの用語はフランス語。<ゲーム>という訳語のものは、<遊び> (ほぼ<プレイ>) と<競技> (ほぼ<ゲーム>) の意味をもつフランス語<ジュー jeu>)。

ところが、ウィトゲンシュタインが「言語ゲーム」というとき、うへのインスピレーションの現場の話からすると、(すくなくともスタートは、) <ゲーム>ということばで、典型的に考えている

のは、<フットボール>のようである。しかも、ラグビーその他の<フットボール>でなく、<サッカー>であろう、ことが推測される。(「ゲームgame」という英単語は、ごくふつうの、平易な言葉であり、哲学、言語学などで、とくに意味、関連はない。一般語であるため、多義でもあり、たとえば、<狩りの対象動物(えもの)>の意味さえある。)

<サッカー>はイギリスで生まれ、19世紀、パブリックスクールで標準化された、といわれる。とくに、1848年、ケンブリッジ大学のフットボールクラブが共通のルールを提唱している。ウィトゲンシュタインは、大学、トリニティカレッジ向かいのヒューウェル寮にすんでいたから、フットボールのようすは日常的にじかに、みききした、はずである。(あるいは、ケンブリッジの講義で<ゲーム>と口にしたとき、本人も聴衆も、まずフットボールを、そしてみちかな見聞とともに、イメージした、はずである。)

< 2 > (判治 98.9.23. [Http://www.kotoba.ne.jp/~dune/index.cgi?k=wit_dost](http://www.kotoba.ne.jp/~dune/index.cgi?k=wit_dost))
後期のウィトゲンシュタインの言語ゲームとルールという概念(?)の扱いは極めて意識的に平坦な扱い[sic]、つまりそれをさらに細かく内分するような概念の導入を忌避していたも同然であるような議論の方法になぜ固執していたのか?この部分のこだわりが、他の哲学な[sic]人々との断層をなしていると思われます。

ウィトゲンシュタインは「自分はたちどまったまま」だという。この態度を、判治氏は、ウィトゲンシュタインの係累にかんする人生経験(3人の兄が自殺ほか)や、とくべつな愛読書である、ドストエフスキーに関係づけておられる。「弁証よりも生活」というドストエフスキーのスローガンが、後期ウィトゲンシュタインの考え方の核だというのである。

かれが、言語ゲームというとき、人間の生活形式のなかで、言語をつかってしているモノゴトが特徴的である、ということである。さまざまな言語活動が言語ゲーム全体であり、言語的弁証もそ

の一部になる。あらゆることが、言語ゲームのなかでは（ゲームとして）語ることが、可能であり、「許されている」。

彼のかたわらには、（大澤氏にしたがうと、）イギリスの古典的資本主義の社会がひろがっている。またその精神を体現したサッカー・ゲームが、生活のなかにはいりこんでいる。はずである。それらに交差し、（ウィトゲンシュタインにしたがえば、）特徴的なかたちで、イギリス的な言語生活が存在している。（おなじ大学の窓から、おなじイギリスの古典的資本主義の社会をみても、たとえば、ケインズは＜経済理論＞だといい、ウィトゲンシュタインは＜生活形式＞だといった。）

それらは、当然、ウィトゲンシュタインのいう＜生活形式＞の一部、あるいは一面である。イギリス社会の特徴を、＜古典的資本主義＞にとどめてよいか。むしろ、教科書的な、＜民主主義＞や＜階級＞などを、（ある観点からは）特徴的とする、向きもあろう。サッカーにならえば、べつのゲームが＜民主主義＞を体現している、といった議論もありうる。戦後、GHQが「日本に民主主義を定着させるため、＜野球＞を奨励した」、という。

さきのマス・フットボールの例でいうと、＜マス・フットボール＞は、＜ゲーム＞であると同時に＜祭り＞でもあった。地域の＜祭り＞であるから、地方ごとのバリエーションもさまざまであった。そして、安息日（日曜）や特定の宗教記念日（ザンゲ日の火曜など）とむすびついているばあいは＜宗教行事（的）＞でもあった。共同体のおおぜいが、おもてだつて（おたがいの参加がみえるかたちで）おこなわれるので、すぐれて、＜社会的＞あるいは＜共同体的＞な活動であった。（＜マス・フットボール＞は19世紀のうちに、急速に衰退するが、理由は、第2次囲い込み（エンクロージャー）や為政者の規制などと、される。）＜ゲーム＞とよんでよい、＜マス・フットボール＞は、もと（ウィトゲンシュタインがいうまでもなく）、ごくふつうの意味で＜ゲーム＞であり、（多面的な）＜生活形式＞であった。

大澤氏は、現代の（世界的にひろがった）サッカーを資本主義の精神とむすびつけられる。これは、＜マス・フットボール＞がもっていた、社会構造的（の一部）を、現代のサッカーもひきついでいる、という指摘と理解することができる。

6. むすびにかえて

最近のサッカーのオフサイド判定の問題と関連して、その社会・共同体とのつながりにかんする考えかたをみてきた。

彼此の文化のちがいか、日本語で＜アシ＞は＜お金＞を意味し、英語で＜お金；資本金；capital＞はさかのぼると＜アタマ；caput＞のことをいう。（両方、典型的な普通語でないが。）そして、うえでのべた、ザンゲ節の火曜（ザンゲ節3日目）には、いまも、イングランド中部で（ごくいちぶで）マス・フットボールがおこなわれる。そして、いく世紀もまえ、おなじ、ザンゲ節火曜にフットボールをしていた。現在の歴史研究家によると、はじめのうちボールがわりにつかっていたのは、デー人（head；首）で、とらえられ殺されたものだ。それを遊びとして（スポーツでfor sport）けっていた、という。そのときから＜フット＞で＜キャピタル＞まわしていたのである。

7. 参考資料

- 1) 大澤真幸 2004「サッカーと資本主義」『性愛と資本主義』所収 青土社
- 2) 判治聡「ウィトゲンシュタインとドストエフスキー」
http://www.kotoba.ne.jp/~dune/index.cgi?k=wit_dost

8. ＜付記＞

最近のサッカー関係の話題についてご教示いただいた、仁愛女子短期大学の職員、学生のかたがたにお礼もうしあげます。

＜終了＞